

なり復員列車に身を任せることとなりました。途中車中から原爆投下の広島や空爆にあった街など、生々しい戦争の傷跡を眺め、再びこのような悲惨な目に子孫は経験させたくないとい心に誓ったものです。

故郷の山河を見ることも、家族とも再会出来ないと覚悟して出征した思いが、再会することが出来て、この上ない幸を満喫しました。

そして祖国復興の決意を新たにし、戦中に受けし公傷は癒えず、傷害者として認められず、心を悩ましておりましたところ、田園を挟んで三キロほどの向かい部落の同姓の家から婿養子の話が持ちかけられたのです。お互いに知りつくしていたので諸手を上げての縁談が成立したのです。

私の戦傷に対する家族からの理解もあり、今では孫にも恵まれ幸せな家族の中にあつて老後を満喫しておりますが、やはり生命あつてのものだと感謝しております。

中支数百キロの夜間行軍

東京都 西岡 信治

昭和六（一九三一）年九月十八日、満州事変が勃発してより僅か一年で満州国は独立し新国家が建設されました。日本政府は王道楽土として宣伝し、満州への移民を奨励しました。そして全国の農業者に新天地として開拓を奨め、全国各地より開拓団として北満州へ続々と進出して行きました。また少年義勇軍として若人達が茨城県の内原訓練所で教育を受け、開拓義勇軍として北満州の開拓に従事しました。当時の若者にとっては満州の新天地は憧れの的でもあり、必然中学校の修学旅行もこの遠い満州を選ぶ中学校も増加して来ました。

私は昭和十五年三月、滋賀県立水口中学校を卒業しました。修学旅行は満州と決定していましたが、今年より中止となり残念に思いました。それ

ならばと南満州鉄道（満鉄）の入社試験を受け合格し、卒業すると日をおかず神戸の三宮港から大連行きの汽船に乗船し満州国へと向いました。二泊三日玄界の荒波にもまれながら大連港に到着、上陸して初めて見る満州人の姿に驚きました。大連駅より有名な特急アジア号に乗車し、満州国の首都新京（長春）の先にある一面坡駅へと向いました。さあ満州へ来たぞと胸が高鳴りました。

南満州鉄道は広軌鉄道でレールの幅が広く、特急アジア号の立派な列車と車窓から見る広々とした平原に驚きました。特に言葉通りの新天地と胸を弾ませました。広々とした平原の中にある私の勤務駅である一面坡駅に下車すると、「ぶるっ」と震えました。満州の春はまだ遠く一面雪景色で駅近くにも雪が残っていて冷たい風が吹いていました。

一面坡駅は余り大きくなく初心者には最適の駅で約半年間ここに勤務しました。内地とは違いのんびりしておりましたが、それでも満州語の勉強、

仕事の勉強で多忙な毎日でした。

昭和十二年七月七日、支那事変が勃発し、満州の豊富な物資を支那へ輸送するため国策会社としての満鉄の輸送業務は多忙でした。入社八カ月後に牡丹江市で鉄道関係の教育訓練を三カ月間受けた後、牡丹江省東寧駅勤務を命ぜられました。東寧駅はソ満国境に近い所に位置し、小高い丘に上るとソ連軍の軍用機が発着するのが見えました。東寧にはソ満国境警備の陸軍部隊の兵舎もあり兵隊さん達の乗降も多く軍事駅でもありました。

昭和十四年五月、突如として始まったノモンハン事件により、日本軍はソ連軍より大打撃を受けた経過もあって、昭和十六年八月関東軍五十万人も動員した関東軍大演習が行われ、東寧駅も兵員と物資転送に大多忙で、毎日が緊張の連続でした。この関東軍大演習は、ソ連極東軍を牽制するために行われたと聞きましたが、満鉄の輸送業務も兵隊さん同様に大騒動でした。

東寧駅に勤務中徴兵検査があり、徴兵検査官か

ら「甲種合格」と宣告された時は、飛び上って喜びました。これまで銃後の戦士として満鉄の輸送業務で協力して来ましたが、これで日本軍人として御国にご奉公が出来ると希望が湧いて来しました。

昭和十六年十二月八日、太平洋戦争が勃発し、支那大陸での戦火の拡大と共に、世の中は正に国を挙げての決戦体制となっただけに、入営通知が来るのが待ち遠しい毎日でした。

昭和十六年四月、日ソ中立条約が締結されたとはいえ、虎視眈々として狙っているソ連軍の動向を監視しながらも、南方戦線への兵力補充のために関東軍の精銳は次々と南方へ移動する軍事列車の編成が極秘の裡に進められ、私達の輸送業務も多忙な毎日でした。

昭和十八年三月末日、やっと召集令状がきて、東寧駅の皆さんに見送られ北満州の佳木斯に集合しました。その中五十人ぐらいは牡丹江市の近くの戦車第一師団防空隊に現地入隊し、私は関東軍参謀部教育隊要員として第六中隊に配属されまし

た。

北満の春はまだ遠く、寒風の中での訓練のため入隊後十日ぐらいいして高熱を出し、検査の結果、菱河の陸軍病院に入院することになりました。そしてなかなか退院する許可が下りず、一期の検閲十日前にやっと退院することが出来ました。

あの夜も寒い日でした。真白い積雪の中に衛兵として弾薬庫のそばで警戒中、あやしい人影を発見して弾薬庫係に連絡し、人影を追跡して近づいて見ると週番将校で第一中隊の神田少尉殿でした。「よく発見して適切な処置をとった」とほめられ嬉しくなりました。毎日の訓練は厳しく予想以上でした。三カ月間入院してただけに、訓練と内務教育の遅れを取り戻すために必死で頑張りました。

六月になってやっと春らしくなり、凍土もなくなり草木が芽を吹き出します。そして七月になると大陸性気候で物凄い暑さと、焼け付くような太陽で、昼間の訓練は汗だくで疲労も激しい毎日が続きました。冬は寒くて野外訓練は大変です

が、夏には朝からの行軍と夜は蚊帳のついた防虫帽子をかぶり夜間訓練を行い翌日は軍歌を連呼して帰隊するという男の世界の厳しさを身にしみて感じました。

夏もすぎて秋となり十一月にはすぐ白い雪が降り始め、また厳しい冬を迎えます。そのうち、少しは軍隊生活にも慣れて要領も分り少しは楽になりました。

昭和十九年の新年を迎えましたが、厳寒の中で厳しい訓練の合間に何か物足りなさを感じました。それは支那大陸や南方各地で日夜を問わず命を投げ出して戦っている人達に思いを馳せ、私達は軍務に違いはないがこのような状態でいいのだろうかと申し訳ない思いでいっぱいでした。

二月に入って起床ラップで飛び起きると戦友達がいません。古兵に尋ねますと「船団の防空要員として出発した」と教えられてびっくりしました。

五月になって我が部隊にも作戦命令が発せられ、行先は支那大陸とのことでしたが、少数人員を残

し、部隊全員が軍用列車に武器弾薬から資材一切を積み込み牡丹江を後にしました。

新京―奉天（瀋陽）―海城―錦州―山海関を経由して北支那に入りました。当時、北支派遣軍の各部隊は国民軍と八路军に阻まれ苦労していると、現地に着いてから聞きました。そして満州も広々としていましたが、支那大陸も広いのに驚きました。この広い支那大陸で私達の仲間が血を流しているのかと思えますと身の引き締る思いがしました。

私達の部隊は四月十七日から開始された京漢打通作戦のため北京から漢口に通ずる鉄道線路に面する鄭州、許昌、魯山攻略に参加しました。引き続き五月九日から洛陽攻略作戦にも参加し、歴史にも残る黄河敵前渡河作戦が実施されました。

この大黄河の濁流を敵弾を浴びながらの渡河作戦は悲惨なものでした。一個師団の渡河ですから敵も必死になって弾丸を浴びせてくる。私達は無事敵前渡河が出来るように対岸の敵陣地目掛けて

大砲（高射砲）を発射する。その数時間は壮絶そのものでした。今まで受けた訓練を実戦に活かすのは始めてでしたが死物狂いで発砲しました。無事渡河に成功した時は「ほっと」、「やったぞ」と一同喜び合いました。

休む暇なく作戦続行、この時季は北の蒙古より吹き下す黄砂が激しく、口も目も開けられないほどで口の中はジャリジャリで困りました。海戦術で襲来する支那軍に、ゆっくり応戦する暇はありませんでした。

七月初め竜門攻略作戦に参戦し防空援護中、初めてアメリカ空軍機P 51の来襲に遭遇し応戦しました。演習とは違い実戦ともなれば緊張し、高速の航空機を目標に発射する弾丸はなかなか命中しません。敵機の爆弾投下と機銃掃射により我が軍にも死傷者が出ましたが、敵機にも損害を与え撃退させ防空戦に自信を得ました。

続いて洛陽包圍攻略戦に参加し我が第六中隊防空隊は防空援護のため丘の上に陣地を設置し応戦

しました。丘の上から見下しますと戦況が手にとるように分かりました。そして敵味方の激しい応戦の中で、人が人を殺す、人を殺さねば自分が殺されるといふ戦争の悲劇をまざまざと見せつけられました。

揚子江流域の漢江地域作戦に参加の折は「海交社」屋上に砲列を敷き、一カ月間対空任務に務めました。この間は休日もあり「我に帰った」ような気がしました。広い支那本土で連戦々々で気を休める暇もなく、敵にも被害を与えましたが、我が方にも死傷者や病人も出ました。

八路軍得意の地雷作戦で、至る所に地雷を敷設し、それによる負傷者も出るし、農民と違っていとたちまち兵士に早替りして攻撃して来るなど一瞬たりとも気を許せなかつた毎日であつただけにこの休日は有り難い時間でした。

九月上旬、湘桂柳州攻略作戦に参加し、安徽省から湖南省、広西省にまたがり、漢口―長安―桂林―柳州と延々数百キロの行程を、昼間は戦火を

交えながらの夜間行軍で進撃しました。言葉で言い尽くせない夜間行軍でした。ゆつくりと食事する暇、休む暇もなく、追撃また追撃で、兵士は疲労困憊、病人も続出しました。

攻めても攻めても終わりが無い、占領したと思いつたに移動すれば、手薄と見ればまた襲撃して取り返す大海戦術には手の打ちようがないが、支那本土各地の戦闘状況ではなかったらうかと思いません。一カ月かかりでやっと柳州飛行場に到着し、飛行場の防空の任に就きました。

支那本土には至る所に湖や大きな川があり、これらがクリークで連続されていて支那軍がどこに隠れどこから襲撃するなか、予想もしない小競合いが各地で続きました。気候も大陸性気候で冬は寒いし夏は物凄く暑く気候にも悩まされ苦勞しました。

昭和二十年に入って南方方面も苦戦敗退と続く中、支那本土各地でも苦戦が続き、損害が多めで、四月十日から五月二十日にかけて戦線を離脱する

作戦も行われた模様でした。

五月三日から八月中旬まで湘桂撤退作戦が実施され、私達は「イ号反転作戦」により脚板川橋梁掩護作戦に入り、落下傘爆弾や二百五十キロ爆弾で攻撃され負傷者も出ました。「進撃々々」と違い「撤退々々」の憐れな姿を見て日本軍敗戦を膚で感じて来しました。

終戦を知りましたのは八月中旬、湖南省東湘橋でしたが、改めて敗戦、終戦と聞きますと残念で涙が出ました。終に負けたのか、勝利を信じ頑張ったのに、何のため苦勞してきたのか、多くの戦友を失い残念無念と戦友と男泣きました。

八月下旬湖南省長沙で武装解除させられました。江西省湖口の「鑿官人村」で抑留生活が始まりました。今まで敵国人として必死に戦って来た日本人が支那人からこき使われる身となり、残念な毎日でした。毎日の食事も粗食で量も少なく病人も続出し苦勞しました。

朝点呼の時に村の農家から農業の手伝いの要望があり、数人の者が朝食・昼食付で使役に行き、夕方四時ごろ帰ってくることもありました。また綿糸でチョッキを編み、鉄磨ぎして餅をもらったりして空腹をしのぎました。広い農地の麦まきや収穫の手伝いをしているうちに農民とも親しくなりました。抑留生活中頭には、終戦後の日本や故郷はどのようなになっているのかと思い、望郷の念にかられて眠れないこともありました。また雪の中で寒風に吹きさらされた厳しい訓練、黄河の濁流で敵前渡河する雄々しい兵達の姿、アメリカの空軍機P51を撃ち落とした時のこと、重たい足を引きずり毎夜歩き続けたことなどが次々と頭の中を駆け巡り、敗戦でよかつたのかなと思うこともありました。

昭和二十一年五月中旬、待ちに待った帰国が許可され収容所を出ることになりました。仲良くなった村人達が「謝々」と手を振って見送ってくれました。上海港より復員船に乗船し日本に向け出港

しました。船の中では、収容所から解放された嬉しさと、日本に帰れる喜びで毎日話はずみでした。そして六月の初め鹿児島港に入港しましたが、伝染病患者がでてすぐには上陸が出来なくなりました。船内から鹿児島市の風景や故郷への思いを馳せつつ一カ月近く船内生活をしました。六月二十三日、上陸を許可され、二十四日宿泊した建物の屋上で兵役解除が命令され、復員解体式が行われました。三年余、生死を共にした皆さんと再会を約束し鹿児島を後にしました。